

“Were it but my life”:

A Measure for Measure における Isabella の成長

村上世津子*

(平成17年10月31日受理)

“Were it but my life”:

Isabella’s Growth in *Measure for Measure*

Setsuko MURAKAMI*

At the beginning of this play, Isabella visits Saint Clare to become a sister. However, before she makes a vow, her brother sends her a messenger, asking her to plead Angelo for his life. When she pleads for her brother’s life, she unintentionally awakens Angelo’s desire for her and also her desire for him. Her struggle to restrain her desire is so intense that she breaks down in hysteria. By becoming a kind of “procuress” and asking Mariana to substitute her for an affair with Angelo, she manages to keep her physical purity. However, indicting Angelo for his injustice, Isabella must confess her love affair with him in public. After she goes through this “symbolic defilement” and is touched by Mariana’s true love for Angelo, she recognizes her own sin and shows mercy—the ultimate virtue of a Christian, which she sought to acquire when she visited Saint Clare at the beginning of the play—to her fellow sinner.

key words: chastity, justice, mercy

はじめに

Measure for Measure の筋を一口で言えば正式に結婚していないのに恋人を孕ませたかどで死刑宣告が下され牢獄に引っ立てられた兄の助命嘆願のために妹の Isabella が公爵代理の Angelo の元を訪れたところ堅物で知られる公爵代理が Isabella の貞淑の中に潜む sexuality に劣情を催され兄の命と引き換えに Isabella を陵辱しようとするが彼の計画は背後で事態の成り行きを観察している神のような存在である公爵によって阻止され結局 Claudio と Juliet , Isabella と公爵 , Angelo と元恋人の Mariana の 3 組 (公爵の悪口を言った罰として売春婦との結婚を押し付けられた Lucio の結婚も入れれば 4 組) の結婚で終わる喜劇¹⁾である。行動に決着をつけるのは公爵であるしそもそも公爵が Angelo に全権を委任しなければ Angelo が Claudio に死刑宣告をすることはなかっただろうことを考えるとこの劇の立役者は公爵であると言えよう。Isabella はこの劇の主人公とは言えないかもしれない。だがもし Isabella が Angelo の欲情をそそらなければこの劇は動き出さな

* 英文学 助教授

かったし、最後に采配を振るのは公爵であるとは言えそれは Isabella が Angelo の助命を嘆願して初めて可能になったことである。この意味において Isabella は *Measure for Measure* の行動の鍵を握る人物であると言える。Isabella の言動は批評家たちの想像力を刺激してきたが彼女に対する評価は “a mere Vixen in her Virtue”²⁾ や “militant chastity”³⁾ から “a chaste figure worthy of marriage with the Duke”⁴⁾ に至るまで多岐に渡っている。いや、それどころか彼女の貞淑そのものも評価が確立しているわけではなく、Isabella の理解の鍵は彼女の “masochistic fantasies”⁵⁾ の徴候にあるとする見解や Angelo は彼女の “scapegoat”⁶⁾ であるとする考え方まで存在する。Isabella はまさしく *Measure for Measure* の「問題」人物だと言える。本稿では Isabella に焦点を合わせて *Measure for Measure* を考察したい。批評家たちの間で Isabella の評価は真っ向から対立しているが彼女をどう評価するにしても「貞淑」問題を避けて通ることはできない。そこで「貞淑」を中心に彼女の足跡をたどって行きたい。

I

この劇の行動は兄の助命嘆願のために Isabella が公爵代理の元に赴いたところ堅物で知られる公爵代理が貞淑な Isabella に劣情を催すところから動き出すが、そもそも何故「堅物」が「貞女」に欲情を抱き得るのか。Isabella と Angelo の面会の場面を検討したい。

Angelo の元を訪れた Isabella は最初こそ「罪を罰して兄は許してください」と訴えて Angelo に “every fault’s condemned ere it be done./ Mine were the very cipher of a function/ To fine the faults”⁷⁾ と切り捨てられたときにすごすご引き下がろうとするが Lucio のアドバイスに従って訴え続けているうちにだんだんと弁舌がさえてきて指南役の Lucio が納得できる弁舌を振るようになる。そして Isabella の次のセリフは Angelo の心を捉え始める：

Go to your bosom,
Knock there, and ask your heart what it doth know
That’s like my brother’s fault. If it confess
A natural guiltiness, such as is his,
Let it not sound a thought upon your tongue
Against my brother’s life. (2. 2. 140-45)

Isabella のセリフがだんだんと Angelo の心を捉えていくのは最初は兄の問題として嘆願を始めたが人間一般の弱さに普遍化し、次に Angelo を含めた権威者と罪の問題に限定し最後に Angelo 個人の問題として提示することによって Angelo に彼の心の奥底に潜んでいる弱さを突きつけるからである。

自分の心の奥底を覗いたときにおそらく Angelo は過去の Mariana に対する冷酷な仕打ちのことを想起させられたであろう。彼を含めた人間の弱さについて考えることは今まで下等なものとして抑圧してきた女性に対する恋心 この場合は彼の眼前に存在する若くて

美しく健康で兄のために一人で権力者である彼の元に嘆願に来る勇気と、彼の気持ちを傾けかねない弁舌を振るうことのできる聡明さと修道女を志願して修道院の門を叩いているような貞淑さを兼ね備えた Isabella に対する恋心を意識の上に上らせ始めたことだろう。これ以上 Isabella と会話を続けると深みにはまる可能性があることに気づいた Angelo は Isabella との話を打ち切り、彼女を下がらせようとする。Angelo が自分の元から去っていく気配を感じた Isabella は “Gentle my lord, turn back”(2. 2. 148)と云う。この言葉は一義的には手応えを感じ始めた Isabella が成功を確実にするためにもう一押ししようとする言葉であるが、それは同時に去り行く恋人に縋り付いて自分の方に振り返らせようとするときに使われる言葉でもある。Isabella の言葉を受けて “I will bethink me. Come again tomorrow”(2. 2. 149)と Angelo が答えると Isabella は “Hark how I'll bribe you”(2. 2. 150)と云う。“bribe”という言葉に Angelo が “How? Bribe me?”(2. 2. 151)と言って不快の念を露にすると Isabella は “Ay, with such gifts that heaven shall share with you”(2. 2. 152)と説明する。Isabella のこの言葉が “bribe”という失言を取り繕うために弄されるものでなく、彼女が真摯に天上のものを志向することは修道女になるべく St. Clare 女子修道院の門を叩いたときに規則の厳しいことで有名な修道院により一層の厳しさを求めたことから明らかである。しかしそれを認めた上で “bribe”という言葉が聞き手に衝撃を与える言葉であることはこの言葉を聞いた Angelo が不快感を露にするだけでなく “Ay, with such gifts that heaven shall share with you”という Isabella のセリフの直後の傍白で Lucio が “You had marred all else”(2. 2. 153)と云っていることから明らかである。

Isabella は 154 行目から 160 行目にかけて彼女の言うところの “with such gifts that heaven shall share with you”である “bribe”とはどんな “bribe”なのか長々と説明するが、彼女の説明を聞いて Angelo は不快感を和らげ “Well; come to me tomorrow”(2. 2. 160)と云う。指南役の Lucio も Isabella に “'Tis well. Away”(2. 2. 161)と云うが Isabella はすぐにはその場を去ろうとしない：

Angelo: Well; come to me tomorrow.

Lucio: [To Isabella] Go to. 'Tis well. Away.

Isabella: Heaven keep your honour safe.

Angelo: [Aside] Amen.

For I am that way going to temptation

Where prayers cross.

Isabella: At what hour tomorrow

Shall I attend your lordship?

Angelo: At any time 'fore noon.

Isabella: Save your honor. (2. 2. 160-166)

Lucio に「帰れ」と指示されて一旦は “Heaven keep your honour safe”という挨拶の言葉を述べて立ち去る素振りを見せるが、この後また引き返して “At what hour tomorrow/

Shall I attend your lordship?”と聞く Isabella は何の他意もなくこの問いを発している。しかし Angelo が「明日来い」とだけ言って時間を指定していないことは「時間はどうでもいいから、とにかく早く帰って欲しい」という Angelo の気持ちを表しているとも解釈できる。しかも Isabella は彼女に心を奪われ始めたことを自覚する Angelo が傍白で彼女の魅力と抗おうとしている矢先に Angelo の抵抗を妨害するような絶妙なタイミングで聞くのである。こうした一連の Isabella の言動について考えるときに私たちは彼女の説明に反して“bribe”という言葉は Angelo に魅かれ始めた Isabella の彼の気持ちを惹きたいという無意識の表出であり Angelo ばかりか Lucio に促されてもすぐにはその場を去ろうとしないのは Angelo に魅かれ始めた Isabella の少しでも長く彼の側にいたいという気持ちがそうさせているのではないかという印象を受ける。他方 Isabella に魅かれ始めたことを自覚している Angelo にとっては Isabella が彼の側に長くいればいるほどそれだけ強い誘惑を感じる。別れ際に Isabella が言う挨拶の言葉“Save your honour.”(2. 2. 166)を受けて Angelo が言う“From thee: even from thy virtue”(2. 2. 166)は Angelo の心の中の葛藤を象徴する言葉である。“From thee. . .”は Isabella と Lucio と典獄が退場した後で言われる言葉であり、ここから Angelo の独白が始まる。独白の劈頭の言葉が韻律上“Save your honour”と同じ行の後半になっているということは“Save your honour From thee: Even from thy virtue”が観客の耳に一文として聞こえることを意味している。実際まさにそれが Angelo の言いたいことであり、これが真情を吐露する独白の劈頭になっているところにこの文の凄味がある。

Isabella の心の中に潜在する sexuality がより露になるのは「操を差し出すか兄を見殺しにするか」の選択を迫られたときにどうするかと問われたときの Isabella の答えである。

. . . were I under the terms of death,
Th' impression of keen whips I'd wear as rubies.
And strip myself to death as to a bed
That longing have been sick for, ere I'd yield
My body up to shame. (2. 4. 100-104)

このセリフについて Gibbons は次のように述べている：“To her the physically sensuous is transfigured in the exaltation of martyrdom, the violation only exalts the purity of faith's ecstasy.”⁸⁾このセリフを通して Isabella が言わんとしていることは「もし自分が死刑に処せられたら公衆の前で鞭打たれる恥や痛みも喜んで受け、従容として死につこう」ということであろう。このセリフを言うときの Isabella は公衆の前で辱められ、苦しめられつつも喜んで死についた殉教者のことを思い浮かべていると考えられる。この意味において Isabella にとって「肉体的な感覚が殉教の高揚に変形させられている」という Gibbons の指摘は正しい。しかし死の床に向かう喜びを“a bed/ That longing have been sick for”つまり禁断の床—に向かう喜びにたとえていることは Rosenheim が指摘するように“while adamantly shunning sin, Isabella admits with an equal vehemence to

wishing it”⁹⁾であることを示唆している。Brownは“keen whips”のセリフは“masochistic fantasies”の徴候を示していると考え、Isabellaはmasochistに特有のhelplessnessでAngeloを誘惑する一方でhelplessness故にAngeloを誘惑していないと確信していると述べている。¹⁰⁾またLevinはIsabellaがAngeloに“his heavenly home”よりもむしろ“his physical existence”を思い出させることを無意識の行為と解釈するかどうかは私たち次第だと認めつつも“If Isabella does manipulate Angelo, she is not merely trying to save her brother. Angelo is her scapegoat: by proving that beneath his mask of virtue lies sexual desire, she reaffirms her own virtue.”¹¹⁾と述べている。

なるほどIsabellaの心の中には性的衝動がある。しかしだからと言ってBrownやLevinの考えるようにIsabellaがAngeloを操っているとまで言えるだろうか。BrownはIsabellaが彼女のhelplessnessでAngeloを誘惑していると考え、Angeloが女性のhelplessnessに魅かれるタイプの男性でないことは兄の乗った船が難破し、妹の持参金ともども海底に沈んでしまうと涙に暮れた婦人を見捨てるばかりか不行跡があったという言いがかりをつけて婚約を解消した過去から明らかである。さらには手練手管に長けた商売女の術数をもってしてもAngeloの心を惹くことはできなかったことも忘れてはならない：“Never could the strumpet/ With all her double vigour, art and nature,/ Once stir my temper.”(2. 3. 187-89)商売女の術数にかからないものが素人の策略に参ることは考えにくい。むしろ注意しなくてはならないのはIsabellaに魅かれたことを吐露する独白の中でAngeloが繰り返し彼女の美德や聖徳に言及していることである：“thy virtue”(2. 2. 185); “That modesty”(2. 2. 173); “sanctuary”(2. 2. 175); “saints”(2. 2. 185); “virtue”(2. 2. 187); “virtuous maid”(2. 2. 189)。Isabellaの中に性的な願望が存在し、それがAngeloの性欲を触発したことは既に議論してきた通りである。しかしそれと同時に、いや、意識の上ではまさに全力を挙げて聖なるものを志向していることもまた事実である：“I speak not as desiring more,/ But rather wishing a more strict restraint/ Upon the sisterhood, the votarists of Saint Clare.”(1. 4. 3-5) Shakespeareは*Measure for Measure*を書くに際してCinthioの*Hecatommithi*とWhetstoneの*Promos and Cassandra*を下敷きに行っているがShakespeareがこれらの作品に加えた改変点の一つは女主人公を修道女にしたことである。¹²⁾しかもIsabellaは厳格で知られるSt. Clare女子修道院の門を叩くときにより一層の厳しい規則を望むのである。この改変はShakespeareがIsabellaを粉本の女主人公たちのように単なる若くて貞淑な女性として呈示するのではなく、より高次の聖性を志向する女性に仕立てようとしたことを示唆している。AngeloがIsabellaの虜になったのは彼に肉体的な弱さを思い出させた女性が真剣に神聖なものを志向する女性であったが故である：“Dost thou desire her foully for those things/ That make her good?”(2. 3. 178-79)

兄の弱さは人間共通の弱さであり、Angeloも同じ弱さを共有していることを思い起こさせているうちにIsabellaは逆にAngeloから女性もその弱さを共有することに気づかされる：“Nay, call us ten times frail,/ For we are soft as our complexions are,/ And credulous to false prints”(2. 4. 129-31)。しかしだからといって兄の命と引き換えに

Angelo の求めに応じる気持ちになれない Isabella は兄の “honour”(2. 4. 180)に期待し、兄に死を受け入れる心準備をしてもらうために兄の元へ行く。

II.

彼女の期待に反して兄が生に執着し、妹の操を汚してまでも生きたいと思っていることを悟ると Isabella は次のような激しい言葉を兄に投げつける：

Oh, you beast!

Oh faithless coward, oh dishonest wretch!
Wilt thou be made a man out of my vice?
Is't not a kind of incest to take life
From thine own sister's shame? What should I think?
Heaven shield my mother played my father fair,
For such a warped slip of wilderness
Ne'er issued from his blood. Take my defiance,
Die, perish. Might but my bending down
Relieve thee from thy fate, it should proceed.
I'll pray a thousand prayers for thy death,
No word to save thee. (3. 1. 136-47)

眼前に迫っている死の恐怖に怯えている兄に投げつけるこの情け容赦のない言葉は多くの批評家を狼狽させ Isabella に対する嫌悪感を抱かせた。たとえば Hazlitt は “Neither are we greatly enamoured of Isabella's rigid chastity.”¹³⁾と述べている。そして Quiller-Couch は “she is something rancid in her chastity. . . she is all for saving her own soul”¹⁴⁾と言って Isabella に対する不快感を表している。なるほどこの箇所だけを取り出してみれば Isabella は「命」よりも「名誉」を重視する女性のように見える。しかし Isabella は本当に性についてそれほど狭量な考えしか持たない女性だろうか。

Isabella は兄の助命嘆願のために Angelo の元を訪れたときに兄の弁護をすることについて次のように述べていた：

There is a vice that most I do abhor,
And most desire should meet the blow of justice;
For which I would not plead, but that I must,
For which I must not plead, but that I am
At war 'twixt will and will not. (2. 2. 30-34)

このセリフと先に引用した “Oh, you beast!”から始まるセリフを合わせて考えると Isabella はいかにも操の観念に凝り固まった冷血な人物のように見えることは否めない。

である．そもそも Isabella の姿を見たときの Claudio の第一声は「結果はどうだった？」と聞く中立的なものでなく “what’s the comfort?”(3. 1. 53)と生への執着を示すものであったし，Isabella が婉曲的に望みのないことを伝えた後でもまだ“Is there no remedy?”(3. 1. 66)と確認しているし，“None, but such remedy as, to save a head,/ To cleave a heart in twain”(3. 1. 61-62)と答えた後でさえ “But is there any?”(3.1.62)と執拗に生の可能性を模索する言葉を吐き，Isabella を不安に陥れていた．“Dar’st thou die?”という挑発的な言葉を受けて初めて Claudio は死を受け入れる心準備の兆しを示したのである．その兆しを感じて初めて Isabella は Angelo から操と引き換えに兄の命を助けてやると言われたことについてどう思うか尋ねることができたのに，何故「心を真っ二つにする」方法であろうと生きる術がある限りそれに縋り付きたいという気持ちの残っているものにとっては希望を示唆すると解釈され得る不用意な言葉を口にするのだろうか．：“Oh, were it but my life/ I’d throw it down for your deliverance/ As frankly as a pin.”

Isabella が不用意な言葉を口にするのはここだけではなく Angelo との面会の場面でも “bribe”や “Th’ impression of keen whips. . .”のセリフが存在した．それらのセリフは Isabella の中に潜在する性的な衝動の表出であり，1回目の面会の終わりで Isabella が Angelo に促されてもなかなか帰ろうとしないのは Isabella の中に芽生えた Angelo に対する恋心がなせる業だということは既に議論したとおりである．とするならば Claudio の死を受け入れる気持ちが固まらないときに “Oh, were it but my life. . .”と言うのも Isabella の中に潜む Angelo に対する恋心が口をついて出たものではないだろうか．この点について Brown は次のように述べている：“. . . her most compelling reason for playing vacillation games with Claudio is to sabotage him into proposing rape. . .”¹⁵⁾しかし Claudio に rape を提案させようとしているという考えは Angelo との2度目の面会の後の独白で Isabella が “More than our brother is our chastity./ I’ll tell him yet of Angelo’s request,/ And fit his mind to death for his soul’s rest.”(2. 4. 186-88)と言っていることと矛盾をきたす．独白で語られている言葉である以上，このセリフは彼女の真情を表す言葉と解釈しなくてはならないからだ．

Isabella は真剣に聖なるものを希求しながらも彼女自身に内在する弱さにも気づき始めている．そして必死になって自分の内なる衝動と抗おうとしている．Angelo が彼女の体を求めていることを明確に述べると Isabella は次のように叫ぶ：

Seeming, seeming,

I will proclaim thee, Angelo, look for’t.
Sign me a present pardon for my brother,
Or with an outstretched throat I’ll tell the world aloud
What man thou art. (2. 4. 151-55)

「そんな交換条件には応じられない」と言ってさっさと Angelo の元を辞すのではなく “I will proclaim thee”と言ったり “with an outstretched throat I’ll tell the world aloud/

What man thou art”という激しい言葉で Angelo を脅さなければならないのは外からの Angelo の要求だけでなく、彼女自身の内なる衝動とも闘っているからではないか。しかし彼女の必死の闘いも “Who will believe thee, Isabel?”(2. 4. 155)という一言の許に撥ね付けられる。自力で対処するには衝動が大きくなってきていることを感じる Isabella は兄がそれを抑えてくれることを期待して兄の元に行くのではないか：

Yet hath he in him such a mind of honour
That had he twenty heads to tender down
On twenty bloody blocks he'd yield them up
Before his sister should her body stoop
To such abhorred pollution. (2. 4. 180-84)

眼前に迫った死の恐怖に怯えている兄に “Oh, you beast!”で始まる激しい言葉を投げつけるのは Isabella が冷血だからでなく、むしろ彼女自身が自己に内在する性の衝動を認識し、兄にそのストッパー役を期待したのにストッパー役になるどころか女衞になっているからではないか。彼女自身の気持ちと折り合いをつけるだけでも大変なのに兄が衝動に加担したとあっては通常の実力ではとても太刀打ちできない。“Oh, you beast!”で始まるセリフは単に兄に向けられたセリフであるだけでなく Isabella の自己に内在する衝動との死に物狂いの闘いがヒステリーとして爆発したもの¹⁶⁾だからこれだけの激しさを持っているのではないか。

III.

批評家たちを狼狽させてきたもう一つの問題は virginity にあれほど拘った Isabella が神父に扮した公爵の提案を受け Mariana を彼女の代役にして Angelo と逢引させることに何の抵抗も示さないことである。Hazlitt が “We do not feel the same confidence in the virtue that is ‘sublimely good’ at another’s expense.”¹⁷⁾と言うのも当然のように思える。しかし Isabella の行動を詳細に見てみると、彼女は必ずしも「穢れなき魂」を守ることに汲々としているわけではないことがわかる。Angelo との2度目の面会で Isabella はもし彼女の願いを聞き入れてくれることが罪ならその罪は Angelo に帰するのではなく彼女が引き受けると明言する：

That I do beg his life, if it be sin,
Heaven let me bear it. You granting of my suit,
If that be sin, I'll make it my morn-prayer
To have it added to the faults of mine
And nothing of your answer. (2. 4. 69-73)

Isabella を招き入れるときに召使は1回目の面会の前では彼女のことを “to be shortly of a sisterhood”(2. 2. 22)と紹介したが2回目の面会の時には “a sister”(2. 4. 18)と呼んでい

る．この呼び方の変化に意味があるなら Isabella は 1 回目と 2 回目の面会の間に誓いを立てたことになる．Saint Clare の修道女には “you must not speak with men/ But in the presence of the prioress/ Then if you speak you must not show your face,/ Or if you show your face you must not speak”(1. 4. 10-14)という規則がある．1 回目の面会の時には誓約を済ませていないから Angelo と話をしても問題はないが 2 回目の面会の時には修道院の規則を破っていることになる．しかも 1 回目の面会の時にはまだしも典獄が同席していたし物陰には Lucio も控えていたが 2 回目の面会の時には 2 人きりである．これだけ公然と修道院の規則を破っても Isabella はそのこと自体については何の良心の呵責も感じていない．このように一面では非常に柔軟な思考ができるのに何故こと彼女の貞節の問題になるとそれほど狭量な考えしかできないのだろうか．

この点について Johnson は Isabella について考えるときに私たちは彼女のことを “not only as a virgin but as a nun”¹⁸⁾として考えなくてはならないと指摘している．女主人公を修道女にしたのは確かに Shakespeare が粉本に施した改変点の 1 つであるが Isabella は修道女に求められている規則を破ることに何らの呵責も感じていないから修道女であることは必ずしも彼女の行動の説明にはならない．Rossiter は “As he fears death, so she fears the unknown violence and violation of lust”¹⁹⁾と考え，Kliman は “her horror at rape and her self-respect”²⁰⁾故だと考える．Claudio と Isabella の間で交わされる会話の次の部分を考慮すれば彼らが Isabella に求められている行為を七つの大罪の 1 つに考えていることは Bawcutt の指摘²¹⁾を待つまでもない：

Claudio: Sure it is no sin,
 Or of the deadly seven it is the least.
Isabella: Which is the least?
Claudio: If it were damnable, he being so wise,
 Why would he for the momentary trick
 Be perdurably fined? (3. 1. 112-17)

七つの大罪の 1 つを犯すとなれば Isabella が恐怖を感じ激しく抵抗するのも当然のように思える．しかし姦淫が七つの大罪の 1 つと考えられる一方で St. Augustine は貞淑な心を持っていれば肉体的に汚されても純潔だと考えた：“. . . as long as the mind’s resolve remains constant, whereby the body too made good its claim to be holy, the violence of another’s lust does not deprive even the body of its holiness. . .”²²⁾ *Measure for Measure* を書くときに Shakespeare が下敷きにした Whetstone の Cassandra が兄のために操を捧げた後も「貞女」と呼ばれるのは Augustine の考えに基づくものである．²³⁾それなのに何故 Isabella は Cassandra のように考えることができないのだろうか．そもそも何故彼女が大罪とみなす行為を平気で Mariana に押し付けることができるのだろうか．この点について Goddard は兄が助けを求めているときに手を差し伸べようとせず、ひどい仕打ちをし

たので “therefore, she will now do anything to save him”²⁴⁾だと述べている。彼女のしたひどい仕打ちの償いをするために何でもしたいというのは動機としては充分納得できる。しかしそれなら何故汚れ役を Mariana に押し付けたりせず、彼女が思い直して自分で引き受けないのだろうか。彼女が引き受ければ大罪になるが Mariana ならならぬと彼女が思う理由があると解釈するのが自然ではないだろうか。一体その理由は何なのか検討したい。

公爵扮する神父の話によれば Mariana はもともと Angelo と婚約して結婚の日取りまで決まっていたが彼女の兄の乗った船が彼女の持参金もろとも海に沈んだとき、不貞の言いがかりをつけられて一方的に婚約を解消されたにもかかわらず Angelo への思慕を持ち続けている女性である。公爵は Mariana が Isabella の代役をすると Isabella の名誉は守られるし、兄の命も救われるし、2人の逢引が明らかになれば Angelo に償いを求めることもできるから姑息な手段ではあるが罪にならないと考え Isabella も彼の考えに同意する。この考え方は状況次第では相手の求めに応じることが美德となり得るという St. Augustine や Montaigne の思想に立脚するものと思われる。²⁵⁾ Isabella の置かれている状況と Mariana のそれを比べると大きな違いは、解消されたとはいえ Mariana は Angelo と婚約していたが Isabella と Angelo の間にはそういう関係が全くないことが挙げられる。しかし他方では親しい関係にない女性の名誉を守るために相手をだますことと、兄の命のために操を差し出すことを比べれば Isabella の置かれた状況の方がはるかに切迫しているように思える。状況次第で相手の求めに応じることが美德になり得るなら Isabella の状況のどこに不足があるのだろうか。再度 St. Augustine の主張を検討してみよう。

St. Augustine は “. . . as long as the mind's resolve remains constant, . . . , the violence of another's lust does not deprive even the body of its holiness. . . ”と考えた。なるほど Isabella は死に瀕した兄の懇願を斥けてまで彼女の肉体的な純潔を死守した。しかし “the mind's resolve remains constant” と言えるかどうかについては問題である。“Shakespeare's heroine has a whole mind and has no struggle with herself”²⁶⁾ という Tillyard の見解に反して Isabella は Angelo の欲情と同様に彼女自身に内在する欲情とも闘わなければならなかった。もし Angelo が Isabella に一方的に思いを寄せているだけなら兄のために Angelo の求めに応じて純潔を保つことができたであろう。Isabella が Angelo の求めに応じることが七つの大罪の1つを犯すことになるのは彼女が既に心の純潔を失いつつあることを自覚しているからである。

IV.

「絶望を転じて天にも昇る喜びとする」ために兄の赦免の知らせを隠しておこうとする公爵の計画のために Isabella は衆人環視の下で狂人扱いされ Angelo との不倫を告白させられた拳句に監獄に引立てられそうになる。その後すぐに Mariana が Angelo と寝たのは Isabella ではなく彼女だということを明らかにするので筋の上からは必要ないのにここで Isabella が “symbolic defilement”²⁷⁾ を経験しなくてはならないのは、彼女は肉体的には純潔でも心のうちでは姦淫を行ってきたからである。やがて Angelo の悪口が白日の許に曝されると公爵は “An Angelo for Claudio, death for death;/ Haste still pays haste, and

leisure answers leisure;/ Like doth quit like, and measure still for measure”(5. 1. 402-404)と言って Angelo に死刑を宣告する .公爵の宣告を聞いた Mariana は “They say best men are moulded out of faults/ And for the most become much more the better/ For being a little bad: so may my husband”(5. 1. 432-34)と言って公爵に Angelo の助命を嘆願し Isabella にも彼女の傍らで跪いてくれるようお願いする . Angelo に兄の命を奪われ , 彼女の努力は徒労に終わったと思っている Isabella は初めは尻込みするものの Mariana の度重なる懇願にほだされて膝を貸すだけでなく次のように言って公爵に Angelo の助命を申し出る :

Most bounteous sir,
Look if it please you on this man condemned
As if my brother lived. I partly think
A due sincerity governed his deeds
Till he did look on me. Since it is so,
Let him not die. My brother had but justice,
In that he did the thing for which he died.
For Angelo,
His act did not o’ertake his bad intent
That perished by the way. Thoughts are no subjects,
Intentions but merely thoughts. (5. 1. 436-447)

上に引用したセリフの “Since he was good ’till he did look on me,/ Let him not die.”について Johnson は “I am afraid our Varlet Poet intended to inculcate, that women think ill of nothing that raises the credit of their beauty, and are ready, however virtuous, to pardon any act which they think incited by their own charms”²⁸⁾と述べている . また Schanzer はこの箇所について Isabella がここで “mercy”を示しているのではなくて “judicial pardon”を求めていることが私たちに嫌悪感を抱かせると言っている .²⁹⁾なるほど Schanzer が指摘するように上で引用した Isabella のセリフに “judicial pardon”の響きがあることは否めない .しかしこの地点ではまだ Isabella は兄が処刑されたと思っている . Mariana の味方をして Angelo の助命嘆願をするどころか彼女に膝を貸すだけでも “against all sense”(5. 1. 426)であることを忘れてはならない . “judicial pardon”の響きがあるにしても “I will to him and pluck out his eyes!”(4. 3. 111)と叫んで Angelo に対する激しい憎しみを露にし “justice”(5.1.25)を強く求めていた Isabella が Angelo の仕打ちを “forbear”(4. 3. 116)するだけでなく弁護するのは “mercy”なくしてはできないことである . また Johnson の言葉に反して “A due sincerity governed his deeds/ Till he did look on me”は女性の虚栄心と対極に位置する言葉である .兄の助命嘆願のために Angelo の元を訪れ , 彼を含めた人間一般に共通する弱さを説くことによって兄の許しを得ようとするときに Isabella は彼女自身の弱さ すなわち彼女自身が Angelo に恋心を抱いてしまったこと

に気づかされる。彼女自身に内在する欲情との葛藤は眼前の死の影に怯える兄を“beast”や“coward”や“die”とヒステリックに罵倒しなければならないほど激しいものであった。そしてその後“symbolic defilement”を経て Angelo から「死んだほうがまし」と思えるような仕打ちを受けてなおかつ“I crave no other, nor no better man”(5. 1. 419)と叫び Isabella にも一緒に Angelo の助命を嘆願してくれるように頼む Mariana の一途な愛に触れて初めて自己の罪 意図しなかったとは言え Angelo の欲情を喚起した原因の一端は彼女自身の中にあったこと を認めて告白する言葉が“A due sincerity governed his deeds/ Till he did look on me”である。

結び

この劇の始めで Isabella は修道女になるために修道院の門を叩く。至高の徳を希求する Isabella は厳しさで有名な St. Clare 修道院によりいっそう厳しい規則を求める。しかし彼女が誓約も済まさないうちに兄の使いで Lucio が彼女の元を訪れ、死刑宣告を下された兄の助命のために尽力することを頼まれる。身内の罪のために「より厳しい規則」どころか修道院に現存する「院長様の前でないと男性と話すことはできないし、その場合にも話をするなら顔を見せてはいけないし、顔を見せるなら話をしてはいけない」という規則さえ守れなくなる。Isabella は兄の助命嘆願のために公爵代理の元を訪れたときに兄だけでなく人間一般に共通する弱さを力説することを通して図らずも公爵代理に彼の中に存在する弱さ、すなわち Isabella への欲情に目覚めさせ、ひいては彼女自身に潜在する弱さ Angelo への欲情 をも覚醒させる。彼女に対する Angelo の欲情だけならまだしも、彼女自身に内在する欲情との闘いは激烈を極め、彼女はついにヒステリーの発作を起こす。Isabella は公爵扮する神父の助言で Angelo の元恋人の Mariana に代役を頼むという女術まがいの行為をすることで、かろうじて肉体的な純潔だけは保つことができる。しかし Angelo の不正を追及する過程で衆人環視の下で彼と逢引したと言われ、狂人扱いされ、拳銃には牢獄に引立てられそうになる。このような“symbolic defilement”を経て「死んだほうがまし」と思えるようなひどい仕打ちをされた後でもなおかつ Angelo を愛し続ける Mariana の一途さに触れたときに初めて Isabella は自己の罪を認識して他者への“mercy”を示すことができるようになる。

この劇の始めで Isabella は俗世間との交わりを断つことによって至高の徳を求めようとした。しかし罪を犯した兄の助命嘆願のために俗世間に戻され、他者との接触を通して罪は外に存在するだけでなく、自己の内にも潜在するから世間との交渉を断ち、厳しい規則を求めても根本的な解決にはならないことに気づかされる。俗世間と接触し、自己の罪を自覚させられたときに初めて Isabella は彼女を犯そうとした上に約束に反して兄の死刑を執行した（とその時点で彼女は思い込まされていた）相手の助命を嘆願するという究極の“mercy”を示すことができる。虚栄心どころか“A due sincerity governed his deeds/ Till he did look on me”は彼女が劇の始めで希求した至高の徳 “mercy” を修得したことを証する言葉である。

注

1)罰としての Lucio と売春婦との結婚は別にしてもこの劇の終わりで示唆されている結婚は批評家たちの間で議論的になってきた。すなわちこの劇の終わりで Isabella は公爵に2度求婚されるが2度とも返事を保留するのは、もともと修道女を志願していた Isabella は公爵と結婚したくないのかもしれないと解釈されるからである。また、Angelo をだまして逢引の責任をとらせる形での Angelo と Mariana の結婚で Mariana が果たして幸せになれるのか、批評家たちを悩ませてきた。それ故この劇の genre は議論的になり、Arthur C. Kirsch らは “tragi-comedy” と考え、Frye を代表とする批評家は “problem play” と呼んでいる。この劇がどの genre に属するかは大きな問題ではあるが本稿には直接関係ない問題なので複数の結婚で終わる劇という点において便宜上「喜劇」とした。

2)Charlotte Lennox, *Shakespeare Illustrated: or The Novels and Histories on which the Plays of Shakespeare Are Founded* (London: AMS, 1973) 32.

3)Harold Bloom, introduction, *William Shakespeare's Measure for Measure*, Modern Critical Interpretations (New York: Chelsea, 1987) 1.

4)Richard P. Wheeler, *Shakespeare's Development and the Problem Comedies: Turn and Counter-turn* (Berkeley: U of California P, 1981) 129.

5)Carolyn Brown, “Measure for Measure: Isabella's Beating Fantasies” *The American Imago* 43 (1985): 67.

6)Richard A. Levin, “Duke Vincentio and Angelo: Would ‘A Feather Turn the Scale?’” *Studies in English Literature 1500-1900* 22 (1961): 263.

7)William Shakespeare, *Measure for Measure*, ed. Brian Gibbons, The New Cambridge Shakespeare (1991; Cambridge: Cambridge UP, 1997) 2. 2. 39-41.テキストはこれを使用した。以下この本からの引用はすべて本文中に幕,場,行を記すにとどめる。

8)Gibbons, 32.

9)Judith Rosenheim, “Measure for Measure, II. 1. 37-40: Sounding ‘Breaks of Ice,’” *Shakespeare Quarterly* 35 (1984): 89.

10)Brown, 67, 71.

11)Levin, 263.

12)野崎睦美「解説」『尺には尺を』ウィリアム・シェイクスピア作,小田島雄志訳,白水Uブックス (東京:白水社,1983) 191.

13)William Hazlitt, *Characters of Shakespeare's Plays*, Reset ed. (1955; London: Oxford UP, 1962) 251.

14)Arthur Quiller-Couch, introduction, *Measure for Measure*, ed. Quiller-Couch and J. Dover Wilson (Cambridge: Cambridge UP, 1922) xxx.

15)Brown, 77.

16)Rosenheim, 90.

17)Hazlitt, 251.

18)Samuel Johnson, notes, *The Plays of William Shakespeare with the*

Corrections and Illustrations of Various Commentators (New York: AMS, 1968) 321.

19)A. P. Rossiter, *Angel with Horns and Other Shakespeare Lectures*, ed. Graham Storey (1961; London: Longmans, 1966) 160.

20)Bernice W. Kliman, "Isabella in *Measure for Measure*," *Shakespeare Studies* 15 (1982): 145.

21) N. W. Bawcutt, introduction, *Measure for Measure*, by William Shakespeare, Oxford World Classics (1991; Oxford: Oxford UP,1998) 59.

22)Saint Augustine, *The City of God against the Pagans*, trans. George E. McCracken, The Loeb Classical Library (Massachusetts: Harvard UP, 1966) 81.

23)T. F. Wharton, *Measure for Measure* (Hong Kong: Macmillan, 1989) 28.

24)Harold C. Goddard, *The Meaning of Shakespeare* (Chicago: U of Chicago P, 1951) 443.

25)Wharton, 28.

26)E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's Problem Plays*, Penguin Books (1950; Middlesex: Chatto & Windus, 1985) 130.

27)Wheeler, 129.

28)Johanson, 378.

29)Ernest Schanzer, *The Problem Plays of Shakespeare: A Study of Julius Caesar, Measure for Measure, Antony and Cleopatra*, Routledge Paperbacks 54 (London: Routledge & Kegan Paul, 1965) 102.